郡山市立富田中学校
学校だより
No.38

手をたずさえて

“富中PRIDE”～自信と誇り～

- 自ら学ぶ生徒
- 正しく行動する生徒
- 健康でたくましい生徒

平成３０年１２月１３日（木）発行
【発行責任者】郡山市立富田中学校長　熊 坂　　洋

心に響く歌声と音色を披露！　合唱部・吹奏楽部 コンテストでの演奏

第３５回福島県声楽アンサンブルコンテスト

銅　賞　富田中学校Ａ
滝田沙羅、村上沙由、星　大樹、本田心華
菊地美愛、牧山美里、水口瑛太、河原美幸
菅野柊羽、水口颯太、渡部陽夏乃
江口来偉、栗城叶夢、藤田　春、橋本　翼
佐久間あかり

奨励賞　富田中学校Ｂ
千葉彩乃、山田恋奈、力丸愛花、風岡　駿
坂野円花、遠藤永茉、鈴木葉菜、鈴木愛菜
箭内佑都、遠藤彩香、瀧澤帆花、山口敦矢
齊藤　翔、前田花音、八島　冴、古川雄翔

合唱部練習風景

吹奏楽部練習風景

12月８日（土）に矢吹町文化センターで開催された「福島県声楽アンサンブルコンテスト」では、本校合唱部Ａが『銅賞』に輝き、Ｂが『奨励賞』となりました。ともに、「若人の歌」と「夢みたものは」という情緒溢れる２曲の合唱でしたが、今回から特設合唱部として男子生徒もメンバーとなり、男声が加わることで、とても厚みのある合唱になりました。合唱部の新しい扉を開き、これまた来年度以降の活躍が期待できる演奏でした。

アンサンブルコンテスト県南支部大会

クラリネット三重奏	金　賞	須藤聖菜、大内怜奈、齋藤千桜
フルート三重奏	金　賞	倉澤　舞、大東奈々、近野美森
サクソフォン三重奏	銀　賞	飯村琴海、松田青蓮、角田　凜

12月８日（土）、９日（日）の２日間にわたって、「アンサンブルコンテスト県南支部大会」が須賀川市文化センターで開催されました。本校吹奏楽部のクラリネット三重奏とフルート三重奏が『金賞』、サクソフォン三重奏が『銀賞』を獲得しました。３組の生徒達は確実に演奏技術が上達しており、心に響くすばらしい演奏を披露してくれました。吹奏楽部もまさに来年度に繋がる演奏だったと思います。合唱、吹奏楽部ともに、多くの保護者やご家庭の皆様にも会場に足を運んでいただきました。感謝申し上げます。

授賞式記念撮影

「百合子賞佳作」受賞！髙橋奈々さん

「久米賞・百合子賞」は、本市にゆかりのある作家、久米正雄と宮本百合子を顕彰し、市内に在学する中学３年生を対象に小説・詩を募集し、優秀作品はそれぞれ正賞、佳作、入選として表彰されます。郡山青年会議所が主催し、1962年（昭和37年）から続いている伝統ある中学生の文芸賞です。その「第57回久米賞・百合子賞」において、３年髙橋奈々さんが、５編の詩により、正賞に次ぐ『百合子賞佳作』を見事受賞しました。

11月23日（金）には、ビッグアイ市民交流プラザにおいて授与式が行われました。髙橋さんの受賞作（５編の詩のうちの３編）を裏面に掲載しました。じっくり読んでみてください。

２学期は、運動面だけでなく、文化面での本校生徒の活躍にも目を見張るものがあります。大きな拍手！！

花火大会

君にね　教えたいことが　あるんだ
花火の　ことさ
へぇ　花火　どぉんと咲く　花火かい？

僕の言葉に　君は　こたえない
ただただ君は　うつむいた
ただただ君の　言葉を待つ僕は
静かに　空をみあげた
やがて　一発の花火　もう一発　ほら
また一発
それはそれはもう　美しくて
僕は　思わず　君の浴衣のすそを
強く　引っ張った
僕を見つめる君は　そう
泣いていたね
君は　何度も　何度も　こう言った
消えないで　と
何で僕の　大切なものは　こうもすぐに
消えてしまうの　と

やがて君は　口をひらいた
君にね　教えたかったことはね
僕の　大切な人は　花火になったって
ことなんだ
僕は　くちびるをかみしめた
大波にうばわれた　君の愛しい人達を想って
そのときだ
どぉぉぉん　辺り一面を　光が包んだ
今年最後の　花火だった
泣くなぉぉぉ　元気になれよぉぉぉと

君は　小さくうなずいた
うん　うんと　涙をふいた
そうして小さく　こうつぶやいた

ありがとう　と

赤　酎

父は　赤酎をのむ
爽やかに　喉を鳴らして
幼い頃の僕には　そんな父がすごく
格好よくみえたのだ

父は　赤酎をのむ
みけんに深い　シワをのこして
大丈夫？　喉元まで　こみあげた言葉を
僕は　一人のみこんだ

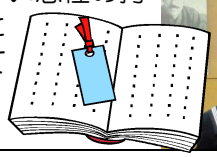
父が　倒れたとき
僕は　僕は
無理をしている父を
少しでも格好いいと思ったことを
悔やんだ

元気になって　父は　帰ってきた
父はまた　赤酎をのむ
赤酎をのむ　父のとなりで
麦茶をのむ　僕もとなりに
父が笑って　僕の頭を優しくたたく
ごめんな　ごめんな　と
返事の代わりに　僕は　父の服のすそを
ギュッとつかんだ
父は　驚いたように　僕をみつめた
父は　泣いていた
そうして父は　赤酎をあおる

夏　色

君が　笑う
真白い歯を　チラリとみせて
僕は　少し　ドキリとして
見つめる先には　空の青
他愛のない　この会話にも
ほら　もう少し　夏の声

君はそう　気付いていないんだろう
僕にとっての夏は　毎年
君が連れてきているってこと
そういおうとして　僕は口をつぐむ
もう少し　もう少しだけ　ね
君の声を　聞いていたいんだもの

君が笑う　まぶしい笑顔で
僕の心は　夏色に染まる

奈々さん独自の世界観を感じます。平易な言葉の中に、情景や登場人物のきめ細かな描写があり、登場人物や作者の心情が温かく、切なく、ほのぼのと伝わってきます。市英語弁論大会でも活躍した髙橋さん。すばらしい感性の持ち主だと感心しています。